

## グローバルイシューを考える

——国際社会におけるミュージアムの役割は何か・新型コロナウイルスを通じて再考する——

陳 永強(チン エイキョウ)

鳥取大学地域学部国際地域文化コース(中国)

### 1. はじめに

今の国際社会が危ないと最近よく感じたことがある。徐々に深刻化されてきた新型コロナウイルス(COVID-19)が世界的に急速に広がっていると同時に、それによつての経済危機や失業者の増加、また観光業、飲食業、国際貿易などに関わる産業チェーンの崩壊を次々に招いた。さらに、各国政府における行政体系の下での消極的な対応も知らず知らずのうちに社会的な恐怖を加速させている。このように、新型コロナウイルスにより一般市民が外に出られず、事実上の引きこもりのような生活をしないといけなくなり、学校教育としてのオンライン授業に切り替えることが注目されていると同時に、社会教育としてのミュージアム(Museum)の展開は未だ勘案されていない。

筆者は外国人として日本に生活しているが、日本では全国で緊急事態宣言が解除されてからミュージアムに足を運べる日常が戻りつつある。しかし、新型コロナウイルスの脅威が去ったとは言える状態ではない。国際社会を一変させた感染症と向き合い、ミュージアムはどう変わろうとしているのだろうか。そこで本稿では、このような背景をもとに、国際社会におけるミュージアムとしての社会役割をどうやって果たしていくのかということを検討したい。

### 2. ミュージアムの形成経過と社会役割

「現代」は、これまでの自明の前提が崩れ先行きが見通せない時代である。世界全体がそのような状態であり、ミュージアムの世界においても同様である。このような時代において、「現在」を知り、「未来」を考えるために、「過去」の歴史を知ることが重要視されている。特に今の現状を考える上で、ミュージアムとしての全体像をどう位置付けるべきなのかと改めて考え直さなくてはならない。

ミュージアム(Museum)という言葉は古代エジプト・プトレマイオス朝の首都アレクサンドリアにあった総合学術機関であるムーセイオン(Mouseeion)に由来する「ムーサイの殿堂」<sup>1)</sup>から始まる。日本語でいう美術館も含める概念であり、またミュージアムという名称を付さない記念館・資料館・歴史館・科学館・動物園・水族館などの様々な形態で展開されている。その流れとしては歴史的にフランスの啓蒙思想の時代に遡るものであって、それまでのミュージアムの閲覧にはほぼ学者を含め富裕層に限定されていたが、当時フランスにおいて、「ルネッサンス」を通して、古典文学を復興し、教会中心の中世的な世界観を離れ、現世を認め、人間性の解放また個性の尊重を主張する活動下で、「市民革命」を行われて、はじめて一般市民に公開された常設のミュージアムとして「国立

自然史博物館」がパリに設置された。東アジアでは明治維新後の日本国から優先的に欧米の文化を受け入れることで、各種のミュージアムが開設されるようになった。

その後「ミュージアム・リテラシー」(Museum Literacy)という言葉を用いられるようになってきているが、これは1984年アメリカのミュージアム教育研究者であるキャロル・スタップ(Carol B. Stapp)によって挙げられた概念である。社会教育的な活用において大切なことは、「資料を媒介とした市民の生涯学習をいかに支援できるかという点になる。その中に内存する歴史的・文化的という要素を学校・社会団体などの教育場との連携強化が求められる」(Stapp 「1994」1992:112-117)。そうすると資料自体を通し、他者と自分という相異なるお互いの文化の理解と価値観の共有をもたらし、多様な文化基盤が築かれるものだと考える。日本では、平成14年(2002)年度からの「総合的な学習の時間」(佐藤優香 2003,2008)<sup>iii</sup>と「週五日制」が導入されて以降、学校教育に閉じ込められがちであった「学びの場」を広げる一つの可能性として、学校側からのミュージアムへの期待が高まっている。こうした期待に応えることは、ミュージアムとしての社会的な役割が明らかになった。以上の経緯をまとめると、ミュージアムは人間の歴史において、人々の学びや気づき、対話や経験共有を生み出し、芸術・学問を支え、社会の基盤を作る大切な役割を果たしていく。

### 3. ミュージアムにおける地域の連携性

昨年、ある展示会のニュースが中国及び台湾のネット上で大きな論争を巻き起こした。それは東京国立博物館と台湾故宫博物館の連携展示会である。展示されている作品は「顔真卿」をはじめとする一連の貴重な文化財であり、また現存1261年の「天下第二行書」顔真卿の『祭姪文稿』の真筆が日本で初めて公開されることである。論争の焦点は、「このような貴重で損傷しやすい国宝が国際展示を行うべきなのかということ」に注目した。さらに台湾故宫博物院が簡単に国宝の貸与行為について、多くの人々が「政治的意味」を持つのではないかと懸念を抱いている。一方に、今回の連携展示会はただ24日目にして10万人を超えたと多くの観客を集まり、ミュージアムの立場から見ると、この展示会は多くの観客を引きつけることに成功しただけではなく、中国の伝統文化及びその長い歴史が現れたことで、多くの日本人その文化を知る上で、国際的な知名度と影響力を拡大し、国際社会におけグローバル市民のつながりが緊密することも求められるのではないだろうかとは私は考えた。

「文化財には価値をもつ」とよく言われているが、その「価値」は一体何だろうかと考えながら、時間を経れば、値段が上がることではなく、美しさによって、国宝になれることもなく、機能・デザインのように目に見えるものとは違う価値がある。それは目には直接に見えないかもしれないが、しかし人間の歴史中で失われてはいけなく、このようなものが忘れてはいけなくという次の世代に伝えてゆくべき価値を持っている物が文化財である。その文化財の真の価値を多くの観客の前に展示することはミュージアムの役割と言えるのではないだろうか。

しかし、国際社会におけるミュージアムの貸し出し及び連携展示・交流などの難しさはすでに直面したように、国ごとによってその国家規定、手続きなどの状況が異なるため、その解決方法や問題意識が未だ統合しておら

ず、今回の国際連携展示会に対し、東京国立博物館と台湾故宮博物館は5、6年の準備期間を経て、やっと無事に成功したことが業界にとって比類のないものであり、多くの試練と論争に直面しながら、このように仕事を展開していることは、ミュージアム業界の人々によって貴重な「前例」となる。このような「前例がある」と考えれば、これから国際社会におけるミュージアムの連携展示がより多くの経験を積み、グローバル化を進む今の国際市民によって、これまでになかった時代になるだろう。

#### 4. ミュージアムにおけるデジタル化

国際博物館会議(ICOM)や日本国博物館法により、ミュージアムの基礎機能は資料の収集・保管・調査研究・展示教育という四つの機能がある。収集した資料は専門家である学芸員によって調査し、研究対象として歴史的な価値を見出す。また研究調査の成果を展示教育を通じて社会に還元するという一連の流れがミュージアムの機能であり、社会的な役割でもある。四つの機能については、それぞれの機能は独自に存在するのではなく、相互に密接に関連している。

そして今、公益財団法人日本博物館協会では、「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」<sup>16</sup>を発表した。こうしたガイドラインに準じるものとしては、国際博物館会議(ICOM)や国際美術館会議(CIAMAM)がそれぞれ、美術館の再開にあたって注意すべき項目を公開している。ここで、私はこれからミュージアムの構造改革には主に二つの機能に力を込めたいと考えられた。

##### ① デジタルアーカイブ

「資料展示のないミュージアムはない」と言われるごとく、近年になり多くのミュージアムでは、デジタルアーカイブ(Digital Archive)に対する意識も定着し、その取り組みが行われている。例えば、実際にミュージアムに訪れることが難しい時期および個体にとって、ウェブサイトでその展示や常設展示物のデジタル写真を見ることができるようになっている。また「解説」と「音声ガイド」という眼と耳の合わせ解説システムが数多く開発され、世界中の多くミュージアムで利用されている。そして「VR」・「MR」という技術を扱い、現場の様子が全景に見えることにより、パノラマサイズが展開できることも一つの将来性が考えられる。

##### ② ウェブサイト

1995年頃からインターネットを使った情報発信が急速に一般化し、ミュージアムのウェブサイトは重要な広報ツールとなった。利用者に展示への興味を抱かせるため、収蔵品や展示に関連した読み物の提供、オリジナルグッズや前売券の販売、問い合わせへの対応などのコンテンツとして備えていく。さらに出版物、共有写真、デザイン製品、ゲーム機能までを含め、様々な「独自の」に作り出す商品を販売していて、ミュージアムの資金運営と長期維持にも効果があるのではないだろうか。こうしたウェブサイトの活用範囲は日々拡大している。その中に携帯電話用のウェブサイトも、若者向けの情報提供やGPSを利用した市民参加の調査データの収集など幅広い用途が期待される。

## 5. 終わりに

世界におけるミュージアムが誕生してから200年ほどを経た。近代から今に至るまで、人々を啓蒙するため、資料を保存・公開するため、教育のためと、その目的や存在意義は様々に変化してきた。そして現在、ミュージアムはあらゆる人々が主体的に参加して体験できる、開かれた「コミュニティの場」としての役割が求められるようになってきている。このように、ミュージアムの社会的な役割、ミュージアム・リテラシーの意義について基本的な理解を深めるとともに、ミュージアムの利用に限らず、ミュージアムは「固定された場」からその多様な可能性に変わることを注目しなければならない。

また筆者は長年に外国で生活していて、その環境中に育ててくれた「外国人」として、国際社会における必要な要素にはやはりお互いにとっての歴史、伝統や文化に対する理解度と尊重感を感じるかどうか、そのための橋渡しを作る機会ということがすごく大事だと思われる。多くの橋渡しを提供することにより、グローバルヒストリーにおける「心の距離」を近づけることを望むと同時に、お互いに各自の歴史を見直し、その繋がりを取り戻す日々が遠くないと信じている。

## 参考文献

「新しい博物館学」全国大学博物館学講座協議会西日本部会編 東京芙蓉書房出版 2008.3

小笠原喜康 「博学連携と博物館教育の今日的課題—近代学校の問題点を超えて—」『国立民族学博物館調査報告 56巻』 281-307P 2005.8.4.

特別展「顔真卿 王羲之を超えた [https://www.tnm.jp/modules/r\\_free\\_page/index.php?id=1925](https://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=1925)

「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」 令和2年5月14日 公益財団法人日本博物館協会

Stapp, C. 1984 “Defining Museum Literacy”, Roundtable Reports 9(1), pp.3-4.

佐藤優香 2003「ミュージアム・リテラシーを育む—学校教育における新たな博物館利用をめざして—」『博物館研究』38(2): 12-15.

井上由佳 「現代のミュージアムにおける視聴覚メディアの役割に関する考察」——コレクションと来館者を結ぶものとして——『特集 映像・メディア・ことば』

---

<sup>i</sup> 本稿において、美術館と博物館を合わせて、ミュージアムとしている。また細かく検討すると、日本大辞林によると、美術館は「美術品を収集・保管・展示し、一般の展覧・研究に資する施設」、博物館は「歴史・芸術・民俗・産業・自然科学などに関する資料を集め、整理・展示して一般の利用に供し、あわせてこれら資料の調査・研究をする機関」としている。これを踏まえるならば、広義の博物館という意味でミュージアムという言葉を用いたい。

<sup>ii</sup> 芸術や学問をつかさどる9人の女神たちを指している。

<sup>iii</sup> 佐藤優香は「総合的な学習の時間」の導入や学習指導要領での「博物館との連携」を背景に、「学校が博物館に求めているのは、モノや情報のデータベースとしての機能」であると指摘する。

---

<sup>iv</sup> これは日本政府による「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」(5月4日改訂)を踏まえ、博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防対策として実施すべき基本的事項を整理したもの。その中に「3密」を避けることや、従事者や来館者の動線と接触などを考慮したリスク評価を行うことを示したうえで、対人距離をできるだけ2メートルを目安に確保することを前提とし、入館制限が必要な場合は、「入館可能時間や入館可能な人数の制限」・「大人数での来館の制限」・「日時指定予約や時間制来館者システムの導入」・「招待制の導入」などを検討することとしている。